

『現代教育科学』一九六二年三月（明治図書出版）

■ 学力は正しく評価できるか

相対的位置づけなど意味をなさぬ

矢口 新

はしがき

戦後学力問題が世上をにぎわわしたことが二度あった。一度は学力低下の問題がきっかけとなって、学力とは何か、基礎学力の発達はなど、やかましい論議になった。また学力調査も盛んにおこなわれて、実際に低下しているのかどうかも論議された。しかし結局はこういう論議を通して、学力の向上ということに関心が向いて来て、落ちついた学習がおこなわれるようになって、論議もおさまった。

二度目は、去年問題になった中学校学力調査問題である。ここでは学力を調査することに絶対に反対する日教組があつて教育問題らしからぬ様相を呈したが、しかし学力調査ということが果して如何なる意味をもっているかということが再び世人に考え直されるようになった。テストを受けるということは日本では、教師も生徒も好きではないようである。日本ばかりでない。外国でもそうであろう。しかしテストは文字通りテストと考えれば、自分の力だめしだったり、自己評価だったりするわけだから、そいひやがることはないという理屈も、ただ理屈だけだというわけには行かない。時々やってみようという積

極的な賛成論もあつてよいわけであろう。現にそういう論もあつて文部省の学力調査に賛成した人もあつたことは確かである。

このように戦後になって二度の論議を重ねて来たけれども、しかし結局学力とは何か、学力調査とは何をする事なのかということにはつきりしないようである。そこに今度のような好ましからざる闘争が行われる原因があるようである。調査を行う文部省や為政者の方も決して十分な理解をもっているとは言えないのである。勿論この問題に最終的結論が出されることはないであろう。しかし一国の教育施策として学力調査が行われるには、それにふさわしい考え方がなくてはならぬ。素人の常識論でそういうことが行われてはこまるというものがある。

一

学力は正しく評価出来るかという問題をかりに、いきなり私に出されたら、私はむしろそれは出来ないでしょうと答える。勿論これは極めて一般的な問として、一般の人に聞かれた場合の事として言っているのである。この問に答えるためには、学力とは何かということについて、はつきりきめておかななくてはならぬ。そして、それを評価するとはどういうことをすることなのか、特に具体的に成立つ方法はどういう方法なのか、そういうことをよく考えておかななくてはならぬ。そういう限定を一つ一つ加えてゆくと、最初に出された学力という概念が、次第に厳密になって、言葉こそ同じ学力という言葉を使用しているけれども、最初に使われた常識としての学力とは似ても似つかぬものになっていくであろう。そういう点がかく見逃され勝ちで、しかも学力を評価して、その結果人間の価値がきめられるというような錯覚が横行している。そういう点をまず改めてかからなくてはならぬ。まず一般に学力という時と、テストしたり、調査したりする時の学力とは必ずしも

同じではない。或はもっと厳密に言えば、調査される学力は一般に学力といわれている中のこれこれであるというごく限定されたものである。しかも余りにきびしい限定であるから、学力などという言葉は使わない方がよいと私は思っている。

現在、学力調査という言葉、或は学力テストというのは決して学力をしらべるとかテストするとかという意味で使われているのではない。そういう一般的な使い方をするのではないが、それよりも普通に使われるのは或る一定の方法をもった、例えば文部省の行う学力調査とか、県教育委員会の行う学力調査とかという或る具体的なもの、特殊なものを指して言っているのである。普通名詞でなく、むしろどちらかといえば固有名詞である。その具体的にある学力調査、現実に行われている学力調査とは何物であろうか。

それはまず誰も認めていることとして、態度、習慣、技術（技能）のようなものを調査しているものではないということが言われ得よう。またいわゆる問題解決能力などというものを見るには極めて困難性がある、多くの場合は行っていないということも、多くの人々によって認められている所である。従って一番普通に行なわれているのは記憶の調査だということ、知識をもっているかどうかを知るものだということになる。だから、こういうふうに限定して来ると、それを学力調査とよんでよいかどうか問題になるであろう。特にその結果を言い表すのに、一般に人間の能力を意味するような学力という言葉を使って、学力が低いとか高いとかいうのは極めて多くの誤解を生ずるものになるわけである。やはり今のわれわれのもっている方法では、学力を評価することはむづかしい。とくに今それをおこなう目的が、大量の児童生徒の一斉評価というふうなところにあるとすれば、まず不可能だという方が適當なのではないか。調査しているのは学力とよばれるものの中のごく一部分であって、それを学力とよぶかよば

ないかは言葉の問題だといえそうであるが、しかし、一方に極めて広い意味で学力という言葉が使用されているから、そういう言葉をこの限定されたものに対して使用するのには適當でないのではないか。

二

学力という言葉が広い意味に使われていると言ったが、本当のことを言うと、広いもせまいもない、無意識に使われていると言った方が適切かも知れない。広い意味に使われているというのは、実はそういう使い方があるという意味ではない。実は漠然としてつかまえておかないままに使われていると言った方がよいかも知れない。それはたとえば次のような場合である。

学力調査は普通教科別におこなわれる。いなきまっついていると言ってよい。そして、一時間か二時間位の間で行なわれる。二時間というのはまあ多くない。そして十問とか二十問位が問題の数である。そして一問、一問に対して反応を求め、正しい解答が十問のうち八問とか七問とかなる。採点にはさまざまな方法があるが、多くの場合一問一問に何点かを配分する。十問で百点として、一問に十点を配分することもある。八問出来れば、この場合だと八十点である。七問なら七十点ということになる。さてこの点が、学力ということになる。八十点の方が、七十点より、学力が高いということになるわけである。あの子供は、国語の学力が自分より高いなどという。ただ一回のテストで学力が高いとか低いとかそう簡単にいえなからう。しかしそれでもこの程度で限定されて使われているのなら被害は少ない。所が学力という言葉は、だんだん拡大されて来る。特に教育者でない素人(?)の中でしばしばそういうことがおこなわれる。五つの教科の点を平均して、学力が何点だなどという。平均するなどということに果して意味があるのか。数字だから平均は出来るけれども、算数の問題が八つ出来た

ことと国語の問題が七つ出来たこととがどうして平均されるのだろうか。それが学力というものを表わすのだろうか。そういうカラクリは私には全くわからない。所が平気でそういうことが、そういう考え方がおこなわれている。そして八〇点の学力などという妙な数字が出て来る。七五点の学力と八〇点の学力とを比較すれば、八〇点の方が五点だけ高いと考えられる。この時考え方の上では、学力の完全なものは一〇〇点だと考えられている。そして学力というのは、そういう時、いつの間にかやら、純粹に理論として考えられる学力そのものというようにかわっている。そして、完べきな能力としての学力は一〇〇と考える。そしてそれとの対比で、八〇点というのは、八割位の程度でその学力をもっていろいろと考える。いつの間にかやら人間のもっている能力そのものといった学力概念にかわってしまったている。そうして、ごく一部のことが調べられたなどということは忘れられて、いつの間にかやら学力全体をはかったと思う。人間全体をはかったと思う。全くの無茶な拡大解釈なのである。

もちろんそのことは誰かが指摘すれば、そんなことは知っているという人はいる。しかし実際に調べられて、点がつけられて、それ以外には何もそういうものがなければ、それだけがいつも問題になる。学力にはまだ外にいろいろなものがあることは知っていても、具体的には問題にならない。そして人間をはかる尺度としては、調査の結果しかないから、いつの間にか、調査の結果が人間そのものをはかる尺度となってしまう。あの人間の学力は八〇点などという。一〇〇という完べきにちよつと欠けているなどと考えるようになる。

とかく学力という言葉は、右のような漠然とした考え方で使われている。そしてこれがただ素人だけのことならよいが、文教当局でも大してちがわない程度で学力調査をやっている。教育者だってそうである。こうして学力調査の結果において害毒をながすことになる。一般

に学力という場合と学力調査で現実に対象となる学力とは同じでないということとは、いくら強調されてもされすぎということはない。私はいつか学力調査は手相をみるようなものだと言ったことがある。その意味は誰かの手を見て、この手は百姓をやる手か、そうでないかの見当をつけることが出来る程度だという意味である。手の形をみてその程度の見当はつけられるが、それ以上百姓が果して上手か下手かなんてことはよくわかりはしない。学力調査もその程度である。拡大解釈は絶対禁物である。

三

かなり理想的な状況があつて、学力を調べるのが思い通りに出来るという場合、どんなことがおこなわれたら学力が調べられるという言葉にふさわしいことがなされたと言えるであろうか。学力というのは、学習によって成立した、形成された能力ということであるから、人間のもっている力はあるとあらゆるものがみな学力である。現在人間が行動する力はみな学習したものである。この場合の学習は学校で授業を受けたという意味でない。家でおぼえたこと、遊んでおぼえたことも、本当は学力といふべきである。しかしそこまでひろげては普通考えない。そういう広い能力のうち学校で問題にしている能力をいふと考えるのが妥当であろう。学校ではどのような能力を問題にしているかといつてもちよつと答えられない。教科、道徳、特別教育活動、学校行事という四つの領域において、能力をのばすことを考えているが、この四つは何も能力の分類ではない。教育方式の分類である。能力というのは行動に即している言葉であるから、むしろ知的行動とか、技術的行動とか、道徳的行動とかと考える方が能力の分類に近いであろう。しかし能力というのは、いつも具体的なものとしてしかとらえられないから、知的行動といった分類では、それを調べることは

出来ない。文字が読めるかといっても、それでもまだ調べることが出来ない。これこれの文字が読めるかときまっても来なければ、その学力があるとかないとか言えない。数算的計算能力があるかといってもそれでは調べることは出来ない。分数の計算が出来るかといってもだめである。2/5と3/5とを加える計算が出来るかとおかなければ、それを調べることは出来ない。道徳的行動といってもだめである。人に親切であるかといってもだめである。これこれの場合に、こういう態度で親切をつくすことが出来るかとおかなければ調べることは出来ない。そしてそういう具体的なものが調べられて、そのことはわかったとしても、それが直ちに、文字を読む力がわかったことではないし、分数の計算力がわかったことでもないし、道徳的行動力がわかったことでもない。その具体的に調べたことの出来、不出来以外には何もわからないということの方が正しい。ただ2/5と3/5とを加えるということは、その加え方に一般的な法則がある。その含んでいる法則に関して適用を誤って居れば、それはその法則を使って計算することは出来ないという事は出来る。とすれば、2/5と3/5の加法において、それを4/5と答えたものと、5/10と答えたものではおなじあやまりでもちがった意味をもつ。前者は2/5と3/5のどちらかの分子を2と見まちがって不注意のあやまりであったかもしれないが、後者は分数計算の法則を身につけていない結果かも知れない。また前者は分子である2と3とを加えるという整数の加法が出来ないからだと考えられる。

さてこういう具体的な能力をきめて、それを調べるとなると、さまざまな方法が必要となる。文字とか、計算とかは紙の上で出来るけれども、技術とか他人に対する行動とかは紙の上で調べることは出来ない。その行動をやってみて、わかることであるから、それを観察したり、結果をみたりしなくてはならぬ。それらをすべてしらべてみると

なったら大変な時間と努力を注ぎこまなくてはならぬ。あらゆる方法を使用しなくてはならぬ。一人の対象に対してもそうである。一人一人を一人一人の調査員が調べることにならなくてはならぬ。五十人の人間を調べる時には、五十人の調査員或は百人の調査員が必要であるような学力問題もある。それらを合わせてはじめて学力を調査したといつてよい。

四

このような調査をした結果は、こちらが調べる項目を立てたのに応じて、これは出来るか出来ないかといったことが一つ一つ出て来るのである。それらを全体として見渡せば、これ、これのことは出来るが、これ、これのことは出来ないということが明らかになる。しかしこういう学力調査は実は今までやったことはない。現に行なわれている学力調査というのは、上にのべたような一人一人について何が出来て、何が出来ないなどということ明らかにするものではない。あらゆる分野にわたって、そういうことを明らかにしようなどというものではないのである。

現におこなわれている学力調査は大ぜいの児童に対して一斉におこなうということが前提となっている。学級の全員とか、一学校の学級全員とか、更に一地域、或は全国の全生徒といった形でおこなわれる。どうしてそういうことがおこなわれるのであろうか。一つは学級全体に対して一つの問題を課しそれが出来るか出来ないかをみることは教育の効果がどれだけかということを見るという意味がある。五十人のうち何人が出来て何人が出来ないかということがわかるというのである。これは一人一人の問題でなく、一つの問題を何人が通過したかということである。これは教育効果ということであろう、これはどちらかといえば教師の問題である。どれだけの生徒が出来るか

ということがわかり、どれだけの子供が出来ないかがわかり、誰と誰とが出来ないかがわかれば、それによって次の指導が成立つてであろう。学力調査がそういう意味に使われれば、それは教育効果調査とでも名前をつけた方がよい。学力などという生徒のもつ力に即した表現を使わない方がよい。そしてそれは問題をやったのに応じてそれだけのことがわかる。数学の分数についてやれば分数の教育効果は何%の通過率と考えたらよい。これこれの問題について調べたら、これこれの通過率ということで表現すれば、それは過不足なしということである。あまり害毒を流さないですむというものである。

しかしこれによって一つの学級と他の学級との通過率を比較すれば、それは場合によっては教師の比較になるということもある。また学校の比較になることもある。しかしあくまで具体的な問題についての通過率であるから、学力調査という言葉でよぶのはふさわしくない。学力などという一般的な能力ではない。

最近おこなわれた文部省の一斉調査は、本来は右のような立場の調査であるべきである。極めて限られた問題しか調査出来ないような前提があった。全国一斉の調査だからとも学力などと呼ぶものはしらべられない。所が、そういう調査でありながら、しかも個人の点数をつけるというのはどういうことであろうか。それはただ通過率でなく、いくつかの問題に点数を配分して、全体を百点とする。そしてその点を一人一人比較して、生徒の相互の比較をするという考え方である。十個の問題を八つやったものと、九つやったものという比較の仕方である。九と八の比較で、数の多い方がよいということであるが、これは前に述べた通り、学力の比較ではない、にもかかわらず学力の比較と考えられるのは、一種の錯覚である。これは教育の効果の測定でもない。えたいの知れないものである。

五

現在おこなわれている学力調査は、競争であり、競技であり、勝負の世界といった感が深い。点をつけて順位を問題にするといった趣味は、スポーツにつながるものである。標準化された検査というものやはり同様だと言えよう。すべての人間との間で試合をしてみるといった趣味が強く働いている。しかしそれならそろばん競技大会や、漢字書取競技大会とかいったものの方が、よりはっきりした目的をもっているし方法も妥当である。算数競技大会とか英語聞きとり競技大会とかといったごく限られた分野で、多くの競争大会でも開催した方が趣味を満足させられる。しかし、学力調査などといういかめしい名前につけない方がよいのではないか。

学力を調べるといっても、一時間や二時間で国語全体の学力とか、数学全体の学力とかを調べるということは到底不可能である。そういう考え方はやはり手相拝見に近いと言わなくてはならぬ。手相拝見に近い教育測定も一時流行したことがあるが、それは学力の調査ではなかった。学力とは一人一人がもっているもので、それ自体を構造的にとらえて行かなくてはおさえられないもので、相対的な位置づけ、順位などでは何の意味もなさないものである。

こうしてみると、学力を調べるといっているのは今考えられているような方法とは全く異った方法で行なわれなくてはならぬものであろう。今のような方法もその一部をなすかも知れないが極めて小さな部分である。観察や問題やさまざまな方法が、積みあげられ、長時間にわたって、あらゆる分野にわたって調べられなければ学力を調査したことになるまい。それは教育者が教育しつつ、明らかにして行く以外にあるまい。しかしその方法こそ、教育的な学力の調査である。